

信をとらぬによりて悪きぞ

「一。『信をとらぬによりて悪きぞ、たゞ信をとれ』と仰せられ候。善知識の『わろき』と仰せられけるは信の無き事を『わろき』と仰せらるゝなり。然ば前々住上人、或人を『言語道断わろき』と仰せられ候ふ處に、その人申され候、『何事も御意の如くと存じ候ふ』と申され候へば、仰せられ候『ふつと悪きなり、信のなきは悪くはなきか』と仰せられ候と云々。」

「信をとらぬによりて悪きぞ、たゞ信をとれ。」

これが、蓮如上人にしても、その他の善知識（こゝでは、蓮師の御子様方、及びその御弟子方のこと）にしても、常に仰せられる異口同音の思し召しであった。信のないことが悪い。ただ、信心のないのが悪い。それは又どうしてであろうか。

けだし、全てのことには、本と末とがある。末は本あつておこり、本によつて末は治まる。衆生の悪業は数えられぬほどある。けれども、その根本は一である。善もまた色々な形をとる。しかしその根本は一である。

そこで、末より本に帰り、本をおさえて、「信のなき事を悪きと仰せられる」のである。

蓮如上人がある時、ある人に向つて「お前は、言語道断悪い」と仰せられた。そこでその人が「何事でも上人の御意のままに致しますから、仰せ下さいませ。何処が悪うございましょうか」とお尋ね申すと、

「ふつと悪きなり、信のなきは悪くはなきか」

と仰せられた。「ふつと悪きなり」とは、「ふつと」という言葉は「都て」又は「悉く」ということである。「何処が悪いというよりも、一切が悪い、都てが悪い。信のないのが悪い」と仰せられたのである。信はすべてある。

和讃に云く、

「大聖易往とときたまう 浄土をうたがふ衆生をば

無眼人とぞなづけたる 無耳人とぞのべたまう。」

『安心決定抄』に云く、

「自力にて往生せんと思はるは闇夜にわが眼の力にて物を見んと思はんが如し、更に叶ふべからず、日輪の光を眼に受取りて所縁の境を照し見る、これ併しながら日輪の力なり、但し、日の照す因ありとも、生盲の者は見るべからず、又眼開きたる縁ありとも闇夜には見るべからず、日と眼と因縁和合して物を見るが如し、帰命の念に本願の功德を受取りて往生の大事を遂ぐるものなり。帰命の心は眼の如し、撰取の光は日の如し、南無は即ち帰命、走れ眼なり。阿弥陀仏は即ち他力弘誓の法體、是れ日輪なり、よて本願の功德を受取る事は、宿善の機、南無と帰命して、阿弥陀仏と称ふる六字の中に萬行萬善恒沙の功德たゞ一聲に成就するなり。故に外に功德善根を求むべからず。」

「帰命の心（即ち信心）は眼の如し、攝取の光は日の如し」

「日の照す因ありとも、生盲（生れながらのめくら）は見るべからず、又眼開きたる縁ありとも闇夜には見るべからず。」

信心は光によつて開かれたる眼であり、光を見る眼である。

「帰命の念に本願の功德を受取りて往生の大事を遂ぐべきなり。」

眼が開けば、一切を受取り、眼を失えば、一切を失うのである。

「本願の功德を受取る事は、宿善の機、南無と帰命して、阿弥陀仏と称ふる六字の中に、萬行萬善恒沙の功德たゞ一聲に成就するなり。」

信心の眼が開けば、一切の功德を得、疑いの無明のまま、盲のままであれば一切を失うのである。

故に、蓮如上人は、言語道断悪いと仰せられるのであろう。

石州の河野直臣氏は、もう長い間、眼を患つて困っている。右の眼はすでに京都大学で出してしまつて、頼りにするのは左の眼だけである。いよいよその左も悪くなつて、ある朝起きて見るとホツチリ何もかも見えなくなっている。一切を失つたのである。ところが、外に又病が出てそれを浜田の病院で治療した時のことである。浜田には近頃、田野という眼科医が帰られたそうだが、最後の気休めに見てもらおうと夫婦で相談してその医院に入った。かねて京都医大で宣言された通り、何やらが何やらになつて膿が出来たので、いよいよ最後の最悪の場合になつていたのである。

田野先生は、「何とも言えぬが、この通りの眼、大学にも暇を出した眼を治した経験が幾度もあるから入院して見よ」とのことです。ところが一週間ほど経つた時、先生が「しめた。眼を一つ拾うたぞ！」と叫ばれた。先生が独特に考え出された注射薬のききめが現われたのだ。それから少しも見えなかつた眼が少しづつ見え出して来た。「もう二、三ヶ月の間、時をかせ、○・七位の視力は必ず出してやる。そしてこれで治つたら、再発の氣遣いなし」と言われるそうだ。右眼を見て「こんなことをしなくてもいいのに」と言われるそうである。

再び開くはずがないと言われた眼に光がさした時の喜びの程が思い知られる。棄てられたものが生きてくる。暗が光となる。多くの失明者が助けられて仏様のように喜びつゝ礼を言っているそうである。その先生は「医は仁術」を身を以て実行されているそうである。

仏を大医王と言われる所以がしのばれることである。久遠劫来の生盲が、世尊の教という開眼術によつて如来の智慧光が拝まれるようにして下さるのである。

信心とは、二尊によつて開かれたる眼である。

信心は如来の大海そのままの至上善であり、凡夫の心は悪そのものである。たとえ、善であつても有漏善として、煩惱そのものを雑入混入せるものであり、随縁の雑善として、長続きのするものではない。その不善雑悪の心に、まごころを廻向して、末とおる信心を成就して下さるのである。

御文章には、

「仏心と凡心と一つになるところをさして信心獲得の行者とはいふなり。」(二ノ九) といひ、又

「更に一念も本願を疑ふ心なければ、辱くもその心を如来のよく知らしめして、既に行者の悪き心を如来のよき御心と同じものになしたまうなり、この謂をもて、仏心と凡心と一體になるといへるはこの意なり。」(二ノ十)

と仰せられ、又  
「信心といへる二字をばまことのこころと訓めるなり。まことのこころといふは行者のわろき自力のこころにては助からず、如来の他力のよきこころにてたすかるが故に、まことのこころとは申すなり。」(一ノ十五)

とお説きになった。これ皆、信心を信の文字の本訓にしたがい、お説き下さったものであつて、信心は、如来廻向の真実心たることを示されたものである。

信心は、あかき真実である。偽らざるまごころである。

如来はこのまごころを廻向して、衆生の心を成就したまうのである。そしてそれはやがてお念仏となつて相續して下さるのである。

「信をこらぬによりて悪きぞ、たゞ信をとれ。」

信心がなければすべてが悪い。一切が悪い、言語道断悪いと言われるみ心のほどがわからしていただけ。まごころを持たないということは、一二悪いということとは違つて一切が悪いことである。

信心のない人は油断がならぬ。今は親しいようでも、何時どうかわるか、煩惱の相は、空ゆく雲と変わりはしない。善の相も一瞬にして悪となり、愛もたちまち憎となる。善悪を越え、愛憎を越えたまう太陽、永遠の慧日、それに根ざす信心だけが、変わる世に変わらぬたった一つのものである。

信心は、部分我の事実(随縁の雑善)ではなくて、全我の相である。であるから、信心の曇りは全我の曇りである。信心の淳一は全我の淳一である。眼が半ば濁れば、その人の見る世界も半ば濁り、全て失つて盲となれば世は暗となるが如くである。

信がないということは一切を失っていることである。極悪であることである。大患であることである。